



軍家物語巻之六

特別
A12
5098
11



112
5092
11

平家物語卷第十二

重領被斬

平大内云云流

冬河守家後

吉野軍

吉田大内云云流

長谷六代

長谷六代

法性寺合氣

大地震之河法

女院之入京

公依房兼村

十良孫人云云流

六代

召

六道

勢の中へ石を以て料しり飛脚踏む事
多し目野に籍よとく次女は
申しきる中ゆき侍漢の娘五条の
大曲云因隠りの養子少幸は乳人ゆ云
典持ありしとて西園より我と書
る身は流り赤い都へゆりよとせ行く
と婦は更な位乃高くと回若とてい
と云ふゆそと知るるこそは位中將守
後乃事お向く言ひさるるは果
守

情と多しゆく長都人愛ゆき我とて家
後の事因り初るると思ふとてさる
と美人は後れ我と大曲ゆりて年
ごり身の者もた位中將別のおり此
お狐有りし女房のいり此と云ふゆ有
守打は格ゆまゆと格せれゆとて
とらゆとてふゆとて言ひまは守
後乃事大曲ゆりて年ゆりて人ゆり
弟く是よ大曲ゆりて年ゆりて女房

せよとて指差すは山もさうん程の世に
足水の空も筆はさうこそ物もこれ
とて石観の石一筋の位に中ねるす
と筆澤く

それあるを後のかぶさうしとあらも
うらのかへみおぬきそへあり
おれの中をさやと
あまうらふ家なるとい何おしす
まふと浪りおるしとて思ふ

えんちのせ
と程の中へは眼してとて既ち打撃の
山もさうとて今さうしとて川もめ
へいされといわゆるとて川ちさうとて
さうと程の中へは強くとて川ちさうと
わくまさうとて雅うるととて物もさう
すは海へさうとてさうとていふ
海もさうとて後とてさうとて日影の
をさうとて南都といふとてさうとて
あを付くさうとて馬上にせうとて

其の見し言ひし小い三徑南郷ゆきと入行へ
去程南郷北去前三径の中ゆふと信丸寺
て東丈真福寺の大忌集會と全
秋志をり作は重福と云い重福は
人とのととと逸五形乃逆飛少、越の修
因威果れ道理極定せり程すり亦ある
此去恒を非せり、去後体観や丁令
又銘とて金引へ来と全秋志をり亦小
去中水老儒をりトキをりい幾と協盛破

城下時前後う生捕め、去とつ、毛斬へ
うと色を色い遙か程へは後去う層か
去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か
此去上福保たす、去とつ、色を色い遙か程へ
本津の色かて斬、去とつ、色を色い遙か程へ
は、去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か
ゆと、色を色い遙か程へは後去う層か
ゆと、色を色い遙か程へは後去う層か
去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か
去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か
去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か
去とつ、色を色い遙か程へは後去う層か

本津河に死付く急馬一りあしり大
 勢の中と行はれく果て来て人あり
 中只今と浪うし人てり人位の中わら
 ぶあまこい西河う断い人てえうわ
 けりおれと群えきうと思ふや
 ろんさしきまこい西河をわらう
 とてあう西書中あし人ありの中筆小
 孫池のさきし人筆立像して海を行
 ろん人あましく丁のさし上ゆ東向く

居さう西河う東岸ありうとこいおれあ
 りさし西河ありう位の中あま線とけ
 ろへてえとく人あましく我んううり
 物益焼失の餘狭ゆゆいさしく極重
 根中ありうりあし人て未だ霧りしあ
 りとくあましく一入る智く七あ
 り鼻を焼く危ゆ洗きん筆只今も位物す
 達多うと送とけり間王れ言たよ又と衣
 せしと却て天王如來の祀かぬわ極

重画人書地方便唯稱狂得生極手也
楷ありぬまき也新すい目出の画逆と翻し
九雨安養長川淨土へ川梅志新へとよとせ
新くこころしく斬やとと現とたへてそ
討せしきこころり思ひの画の画さうと
しりあまきたらんてり新まともなる皆
僅の神とそ新しうりそ後現とた
そりり切さるる指費ととぬこころり上
大善ありともありとむあり治兼の合裁り

法華寺の香石りしわ打立と火とわせ
やし下たきあり毛そりしとと腹あり
ちり大善ありぬまき也新すい目出の画逆と翻し
九雨安養長川淨土へ川梅志新へとよとせ
新くこころしく斬やとと現とたへてそ
討せしきこころり思ひの画の画さうと
しりあまきたらんてり新まともなる皆
僅の神とそ新しうりそ後現とた
そりり切さるる指費ととぬこころり上
大善ありともありとむあり治兼の合裁り

とていふは古く興は興也をきて日影の西より
身もあはれいふも空をこぼしはよ飛付新てか
かゝるもて甲斐をたもてとてさるる
にさるる神の影を送りさるる頃といふ南
都は信宗上人の遺徳を乞て日影をさる
さるるいふる前につもあて煙をさる
さるる骨といふ骨といふとて骨といふ
見おろしそそ條せさるるそむ山に果
るるる聖と信て極へるる信をたて極

しんやん
生昔のよとを新くまらるる

問 大地震震るゆは

去程の平家の土に極の國の國司は極の
元の頃家此まもてさるるるるるる
邦をたつかりまはれと下安堵のつと極
あよ元暦二年七月九日此日午前此
ころりゆ大地震の動く良之し白河
此ら赤縣の多るる九重の塔より始る
雲舎の空を屋多く或は破るる崩壊

たてあし

倒垂傾ひたさくたかまさけらんん一字いちじをまりりあり
二千にせん之の名なはは院いんとて十七じゅうありん
根倒ねたうととろろわらりん天晴てんせいと
しの口くちをまりんてすむら少せう鬼おにとう一い
多た敷し所しよとあらすゆらららんん一い方かた
との国くにをまりんてすむら少せう鬼おにとう一い
とわらり傾かたむくたかまさけらんんと浸すひんん崩ぶており
と懼震おそ崩ぶれん川かと懼渚さし清せい浪なみ
漂ひ流りゅうとり歸かへりんん足あしをまりんてすむら
子こ

鳥とりかあらわりん天てんとを翔はたりん龍りゆうか
あらわりんん又また入いるらるらるらるらるら
おとりんてすむら少せう鬼おにとう一い
さらりりあらわりんん猛もう火かれんえんまりんん川かにん
てすむら少せう鬼おにとう一い
あらわりんん大だい地ち震しんとも又また何なに者ものか
あらわりんん澄せい湯とうのの安あん信しんのの春はる親せんとのの
内うち震しんめい地ち震しんとも又また何なに者ものか
雲うん子これらののあらわりんん大だい地ち震しん
あらわりんん

二打也、まんじと奏言す、と云ふ、其
町中、まじく家、れ、彫、格、子、れ、し、と、説
く、と、ま、え、い、れ、し、ろ、き、ま、の、真、と、あ、れ、
と、ね、ま、か、ま、考、ろ、も、ね、の、つ、ま、そ、し、ろ、
味、ま、ろ、を、行、し、ま、ま、と、い、お、船、よ、ろ、と、説
ろ、行、か、り、ろ、と、い、お、座、ま、ち、を、お、女、院、と、
く、と、或、と、い、お、興、い、め、と、い、或、と、い、お、車、い、め
り、ろ、ま、ろ、ろ、ら、た、ろ、く、行、ま、ま、お、昔、文、極、天
皇、れ、い、字、了、針、御、三、年、三、月、三、日、れ、大、地、震

中、東、大、寺、に、お、い、ら、ぬ、ろ、ろ、ろ、と、説、あ、ん、也、
又、兼、蓮、院、ろ、い、字、了、天、慶、二、年、三、月、ろ、大、地、
震、中、に、ま、ま、い、お、座、ま、ち、を、お、女、院、と、
前、精、富、の、教、の、書、よ、五、丈、ろ、極、座、を、作、て、
と、説、い、ら、ぬ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、七、月、ろ、坐、
ま、ん、じ、日、ろ、お、七、八、度、ろ、坐、ま、ち、を、お、女、院、と、
ま、ま、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、昔、れ、
な、ま、ま、い、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、
と、い、世、れ、滅、す、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、ろ、

同日八月一日辰戌元冬... 又治元日...
 ... 十日... 同日...
 ... 人更... 如...
 ... 判... 友... 伴...
 ... 後... 河... 其... 人...
 ... 選... 人... 冠... 者...
 ... 推... 委... 之...
 ... 先... 平... 大... 他...

登国内... 苑... 實... 法... 基... 佐... 渡... 國... 横... 渡... 中... 將...
 ... 國... 中... 之... 律... 師... 志... 行... 義... 國... 慶...
 ... 真... 安... 病... 國... 是... 勝... 者... 批... 行... 義...
 ... 國... 之... 刑... 乘... 旅... 者... 之... 術... 務... 國... 之...
 ... 院... 之... 海... 也... 所... 予... 吉... 田... 所... 前... 之... 寺...
 ... 身... 身... 身... 身... 身... 身...
 ... 常... 子... 行... 法... 之... 所... 以... 志...

小吏才にケ度申て
此麻勢の河に流るる
海賊あはる集右兵股と打切く
手家の徳政の八海に
院室の使報しく顔と
平とあまれ身り
多程のし望い
有り小甘てといふ
人画刺面とそりきり一年
海賊あはる集右兵股と打切く
院室の使報しく顔と
平とあまれ身り
多程のし望い
有り小甘てといふ

いしり助とつう年
振舞作は信より
二倍久かか
有り者まの力
曲柄あり
有りま
いしり助とつう年
振舞作は信より
二倍久かか
有り者まの力
曲柄あり
有りま

御の重なりと秘めしありき
て年月と送りそとてと新なり

女院之入

建礼門院と東山の麓吉田此御所
て新ありう室いたは新とて玉作
此の人の人をもとありし人
の命令と由と新りん程といふ人
の奥の扱て入る年とい田
しとて未便しと由とてとあり

女房のありしとてと東山奥室
下とて御を御下とて侍
女院とてと女院の若
里におかしとてと女
しりはとてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の
女院とてと女院の

そ書いひはる物なりとては流しきるをさ
ころはとて治るは月日ありけり
たきいひて指のなきは流しきりて遠
しはとてせしめは流しきりて遠
書はとてしは流しきりて遠
葉櫻のまじりて流しきりて遠
書はとてしは流しきりて遠
くも女院帝光院のまじりて遠
りてせしめは流しきりて遠

そ流しきりて遠
るはとてしは流しきりて遠
ころはとて治るは月日ありけり
たきいひて指のなきは流しきりて遠
しはとてせしめは流しきりて遠
書はとてしは流しきりて遠
葉櫻のまじりて流しきりて遠
書はとてしは流しきりて遠
くも女院帝光院のまじりて遠
りてせしめは流しきりて遠

中人の海り緑蔭の情紅葉山繪かえ
しを筆を及ぶう東よの細香川流つ
岩と苔の閑くありあのほの秋のすま
ゆわくも思ふすな書か秋原を花
て難の菊れつ生くゆらし路人交つ
張つてては秋の身れとくそ思ふす
かりの産玉とじとら也新くくく
は霞雨とくくく一石の秋の
まあり書か物つたの津よの定付新

のい念仏を也新くくく月日送く
新より角く神書月半此五の書く
水色新く指の葉と也くくく
字のまの如院書くく人目橋次と星
へ只今何おれ本くくくく物
くくくくくくくくくくくく
曲柄の立物くくくくくく
世くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく

はく

白糸のし報いんたてれま

せうくを鹿毛海りありきり

ししと也針ありきりきり女院信し意乃

口隆子と極んそ付と也針ありきり

つまのの中や竹昔お思言のきり

ワ筆一太わわりきり新よあらん人

木とと七重交樹よきりきり

あると八切徳あきし思言す長杖交

中礼と物極物凡本きり白心とさきい

清涼教か月と極りつへき極て光と極

す昔の玉極金教乃極り極り極り

とに竹兼束の浩庵の回集の極極

回矢のちのち

去極ゆ道念よの保二位教極本とさき

とに極物り極り極り極り極り

乃極極そきりきり極り極り

極り極り極り極り極り極り

よびてらるる事おかし事うある人きこむ候
かゆきいしくありし其恨深しうあり候
先承なりとす父子は禁下りし事
て一天と志らぬ候とさむはかむあり
ふと秋しとくおあしあさうらな御空
ついと二人しり下り民よ承り申して不
審とさすすと云事なり

土佐藩の夜討

土佐藩の夜討 土佐藩昌後と云
土佐藩昌後と云 土佐藩昌後と云

信教よとらぬ事候とて室へ土佐藩昌
て申者あり候とて大勢あり候あり
叶ふ事候昌後とて勢計しとて一
とて種々五拾金事候とて打立たり
とてとて徳形物候とて事候とて
よりと降沖の小島あり候とて
居あり候と判度候とて事候とて
あり候と土佐藩昌後とて事候とて
室とあり候とて事候とて事候とて

市帳ありす次の日一日約連多し
氣くさるるまに判友成房新考を
引く去依房のちかろくんあろうしあは
そそ不思儀のし世ゆくと去依房と具
てしあまとし室人ん無の衣くあり去
依房の室か初白冠昌後とがてあり
あり判友中とて中合判向はくありふ
王儒い弟座初とこれ使あり室人い去
依房よりうりい乞一年末七丈の物候

いしう去はあ三年の常都此國に此
よ依く平依ありと今世名も精と成
いし室判果らんあろく無とくい子
後人あり中し中く去中し初い又
あん去はのりすり中依下白に中
あらんせりりりり七と七ありすり
これ考まに判友をいしよあとい義
清うてこれ使あり室ひくくあり
ららるるんてらまはる去依房

やうき人徳望のまじり下七枚
又書ききり判友はとと控見めこ
そにしんまれとて土佐房と執て也
さきり土佐房常小ゆり伊やくし
疾く叶れしと秋秋村めまもらん
なすしと申ふておとるり無具か都五
十金後しとそおとるり判友は常
六條堀門若の所と押友は山後表か
門とさうしとと押く是は徳金なり

らては土佐房明
らと申ふは十月十日
此の事と申ふは判友は常
徳一人と申ふは判友は常
白拍子と申ふは判友は常
中解て申すは判友は常
きく書れ起すは判友は常
よめさしはと申ふは判友は常
とていと申ふは判友は常

上帯志史ありふふ方ぬてきり帯
新中軍ありきり緒卜新中軍
引ぬききり階り新中軍矢ぬききり
判者なり階り矢卑負中門にむ
まありきり難文馬難とり見い
し七あり判者馬と并乗り大急ぎし
舟并難階階けり主あり大急ぎし
者下笠履且少く日帯我約あり
途と敵して向んきりきりきり

成ありきり若きなりきり
用きりきり津て新合あり判者
竹ありきり法ありきり南河
用ん地行なりきりきりきり
ありきりきりきりきりきり
喜ありきりきりきりきり
大依倉と中ありきりきり
日向海と勝に討てきり
大軍由甲討てきりきり

口と開をて切ておれしと政ありあしと依
倉の銀五十金ありと人なりと大座ありと
まあせしと到し軍已重料と取とるなりと依
一袋と取とる馬とてとるなりと下立戦とるなり
と大馬とる油と取とる遊びと武座ありと二人
續ありと達とる色い盛念ありと侍ありと侍あり
者かたありと歌と後と人とりと取即とるなりと
て進むけありと依座ありととるなりととるなりと
とと東洞院ととりと進むけととるなりととるなり

て置れととるなりと靴馬ととるなりと迎入とるなりと判
とりしと等しと思しとと後ととるなりととるなり
人代ととるなりととるなりととるなりととるなり
車座ありととるなりととるなりととるなりととるなり
橋捕ととるなりととるなりととるなりととるなり
ととるなりととるなりととるなりととるなりととるなり
ととるなりととるなりととるなりととるなりととるなり
ととるなりととるなりととるなりととるなりととるなり
ととるなりととるなりととるなりととるなりととるなり
ととるなりととるなりととるなりととるなりととるなり

て人いしを申さる判者申して世と
切くは樹へまはちあは馬頭の方の時
金玉丸とて括くは石使おせり勢計あり
まゝいそま言想のたはれ命とい助らうそ
まゝく鑓君へ下へしと空の太儀たかり
あういそま言想のたはれ命とい助らうそ
あ四前とて兵初り時君と討者すとい金丸
下らしとて切くは樹へまはちあは馬頭の方の時
討者すとい助らうそ

横金屋下での舟何種か常記とて伝るを
只舟といえと死と別とせまといあは馬
と判者まゝいそま言想のたはれ命とい助らうそ
あ四前とて兵初り時君と討者すとい金丸
下らしとて切くは樹へまはちあは馬頭の方の時
討者すとい助らうそ

是れ忠の志也者とすくは病にせざる
我れ入るは送るをりりたるもそやまらむ
かゝる判友の吉野の母とくは府ありと
大亂殺くめを判友なりと種舎あり
市中遠を竹くはしゆあつての存あり入
立しての叶はぬ 悪くは依るい世の在
まをりて大場とて何れ中あつてまゝ判友
叶りしや思ひまらんはけりまを敵の後
及ん人きして自害せんとも竹よりと具

乃依者あり善忠信よりい見しゆむ
らり善忠信ハ何れんか今も誓りまを
いぬより忠信の命は誓りまををる
いし由り我れにいと竹へてりまを判
友なりよりまをるまをると今も自害せん
いし志竹よりと忠信何れいあむしゆま
くまをり力竹す世今人共共と十七人忠信
判友
いし人それり共十余人と判友
又吉野山をまをるまをる忠信判友は

いせさうと新くそと毎のううあ十七人共
とせうう款とやくと結うけううあれ
と吉野の執り之龍禪師と先として
大僧と七押考と有りて協志信を前と之
あうり是の後舎り原二位り亦から室の
判友義信とそと多うと忠信と有りて
と七十八人共考も矢把とひて押考の事
うと信川儀教と一亦あり矢と考と多う
射級と有り考と多うと忠信と有りて

判友五の打物ありとせとせとわうすあり
弓と人うと亦ありとせとせと其後
矢種盡うとせと十七人共矢打物靴と遊
やく中前と義と有りて多うと忠信と有りて十七
人と射とせと有り其後忠信と有りて多うと
我と強と判友五と忠信と有りて多うと忠信と有りて
のうり考ありとせと判友ありとせと小
奥州の依者あり其後忠信と有りて多うと忠信と有りて
自衛するとして多うと忠信と有りて多うと忠信と有りて

上常切之此者版十文字之早破之計よりて
形こそ人たつる首之危かりてこそ落の事あり
せそれあもは中へ入るべく忠信の病もるんと
て之をよばむことありたんとてさるる由
か否かこれ之隙とありてそ落延びるそ
まじりぬより粟田は色と母よてそい
てよりさるる作と小条乃言可政い六百余
段に軍兵と難て回と十月九日自執
れかり大は産とありて忠信は也と

穿く粟田はと忠信の二条万里小治り
あり目い人深る女房れさるるのここと立
懸てそのひさる小条は生とありて上階と
押長あり忠信の小社と大は計りて妻
れもかのひさる矢把とて押身指錯り若
散り小社あり知し方とて多く射殺るる夫
程盡るは打物鞘と並と之處の中へ入る我
敵殺ぬ村あり我身と病も負もさるる人
かりとや思ふ人縁とて是より刀と板版十文

破

言上昇切脈をくはくしめりありあり死
ありとありありと刀に銃と口に食に縁しりあり
と向に流し置てそ失しりありと身大熱し先
と入く情におろそありと道に判る者し深き
中踏迷ひ剋角三とく南國なる郡へをわしあり
そ布おひの牧母常盤の所縁たし判ること
中流し志とくく息とけりそありあり
其しりありとより東太寺の色表是寺とより
守りとありとありありと年此言と初とより

伏見澤子松は桂あ山東山ありと多り付
湯あふてそありとより次の年此言と伏見
名志地中秘とてとけありとけあり入るを
おしほし小園とよりありとありとありと
とありとあり

間 十島苑人しゆは
と神と志田はより先生と教和泉津と打
あけしとてありとありとありとありと服
部は奥らたしとありとありとありとありと服

下司平六正徳の平遊に所縁れ志ありきりり
はうしとあひくちかろの輩二百余人お具
し子承此山寺より一とせし町伝ざりし
そゆりりりり養老のあつ坊に母よて口
きりりり矢把さるてりりりりりりりり
川はあさんくし跡きひありしとせて不
やく跡ころりりりりりりりりりりりり
おかのあひりりりりりりりりりりりり
自害してことと失くまされりりりりりり

とるの光義教の場真れりりりりりりりり
たをを勝りりりりりりりりりりりりり
十高飛人の系い和泉に浦中打とる下
一人お具して紅俣園をくち城りりりりり
りりりりりりりりりりりりりりりりり
男不骨れりりりりりりりりりりりりり
病とての存ありりりりりりりりりりりり
あつりりりりりりりりりりりりりりりり
てわいすりりりりりりりりりりりりりり

思ふ者もまゝい形に入て 定宿といふあひつて 御
より六、波、尾、毛、つゝ中、兵、り、あり、ま、は
北条、形、あり、と、毛、尾、馬、一、載、卷、を、入
て、を、あ、せ、ろ、り、を、播、小、条、を、男、と、り、と
南、河、十、島、形、人、を、形、を、揚、て、て、候、す、を、者
に、形、を、入、て、入、は、男、人、の、形、此、山、若
江、形、上、常、陸、播、正、の、と、人、と、り、あ、ま、り、と
小、条、を、入、て、書、陸、播、を、と、せ、め、さ、れ、り、り、は、こ
ま、つ、て、正、明、形、あり、あり、小、条、や、ん、若、形、に、

志、由、り、て、い、い、小、山、播、は、十、島、形、人、を、と、り、と、人、知、り
て、ま、つ、て、入、り、し、て、入、は、入、り、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い
と、その、り、者、の、小、条、は、い、い、十、島、形、人、を、
形、を、入、て、揚、て、得、る、と、い、い、知、書、を、あ、め、切、め
と、り、と、人、の、書、陸、播、を、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い
と、り、中、島、十、人、と、形、を、入、り、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い
小、条、屋、上、下、人、若、男、十、人、と、形、を、入、り、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い
自、此、男、と、案、内、を、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い
入、り、と、下、さ、れ、り、と、十、島、形、人、を、と、り、と、人、知、り、の、ま、り、と、い、い

足中繩あしななをよそへちありううのそね十島じゅうしま人
ありとい半はん丸まる足あし丸まるりし丸まるとらて生捕なまつかり
こそ志こころりりしれそねそねよよ息いきはは足あし足あし
ううううゆゆんんれれそそ刀やいばととるる者もの七しち人にん行ゆへへ書しよ漢わん
房ぼうううそそ刀やいばいい中ちゆう二に所しよ中ちゆうんんととるる者ものありありととるる
十島じゅうしま人にん若わかそそ刀やいばいい一いち所しよ中ちゆうんんととるる者ものありあり
かかうう約やくありありううかかままふふくくううそそととるる者ものありあり
かかままふふくくううそそととるる者ものありあり
いいととすすいいととももりりううううののそそねね書しよ漢わん房ぼう中ちゆう
いいととすすいいととももりりううううののそそねね書しよ漢わん房ぼう中ちゆう

皮かわううつつととおおせせああののううのの精しゆうふふかか十じゅう島しま
人にんふふかかいいととるる者ものありあり我われ身みいい食く下げ人にん
のの男おとこ丸まるああいい食くせせううりりそそねね十じゅう島しま人にんふふかかいい
いいととすすいいととももりりううううののそそねね書しよ漢わん房ぼう中ちゆう
かかままふふくくううそそととるる者ものありあり
小糸せういとふふ糸いとねね毛もうああののいいとと五ご百ひゃく金きん張ちやうととしし法ぽう
連れんいいととすすいいととももりりううううののそそねね書しよ漢わん房ぼう中ちゆう
身みのの金きんままりり小糸せういと十じゅう島しま人にんふふかかいいととるる者ものありあり
ままてて信しんのの書しよ漢わん房ぼう中ちゆうととるる者ものありあり

くまの山系より方略既して後身下人
とせしむるより千載の妙本は六代に
てしるすといふに初めは平家頼朝の
と後には頼朝の御代にありて六代の
せりよりの所とてしるすなりこれ
しりやふれ其業大なる昔藤原の
りありし山のくまの山系にあり
を新くいふと年々もはやくはなり
くまの山系とていふと関東下り
て

次の山系より方略既して後身下人
とせしむるより千載の妙本は六代に
てしるすといふに初めは平家頼朝の
と後には頼朝の御代にありて六代の
せりよりの所とてしるすなりこれ
しりやふれ其業大なる昔藤原の
りありし山のくまの山系にあり
を新くいふと年々もはやくはなり
くまの山系とていふと関東下り
て

孫は勢とて草薙痛む古は坊は押考梅の曾
と七重八重は打りて由人となすてそ
小中り人の平なは嬌む小杜の三佳は中佳
雅益のりより秀六代の中は海とありは
とありわして倭会は海二位は代女小条は
や時政とてし志のりは遊めしあしくいさりく
しらり多りりまきい母と乳人女中と娘
ましくおれ由はありにしあり人三乳ま
鬼と失物とてととめあそそ信連とる

ふらとせりも怪新のありあり人と様と
あましく海とて思ひつゝおゆもまゝ室の
まろしくおれといれ何よく物とて鏡母
へきんらも志新のす勢とてあそそそまゝ
まろ小条のりありまろ物とる男とて屋
あましくあるいさりし内とていあ人新らあそ
あましくおれとておれとていさりし内とていあ人新らあそ
あましくおれとておれとていさりし内とていあ人新らあそ
あましくおれとておれとていさりし内とていあ人新らあそ
あましくおれとておれとていさりし内とていあ人新らあそ

老成靜人なりし武のりせしあしき運業
與用なきはくは早くともありき
母者父母者父の情れ甲子とまじりり
母人もの前とあしきりるる人
満してしといはるる母を武武
とすしあしきりるる母を武武
とすまきと母人もの前とあしきりるる
とていふとあしきりるる母を武武
と後まき母人もの前とあしきりるる

トとせ給きりるる武のりせしあしき運業
母者父母者父の情れ甲子とまじりり
母人もの前とあしきりるる人
満してしといはるる母を武武
とすしあしきりるる母を武武
とすまきと母人もの前とあしきりるる
とていふとあしきりるる母を武武
と後まき母人もの前とあしきりるる

製末志守り二重織内若虫糸白く大
はとま七等り母へと書来れ珠教あり
とんとおれおれとて毛の衣と位元の年比
子服も志珠教も七とて何れも
念仏の父志海七り元とて海へ入ん
とねんや
母とゆくとおまじと新とて父の海へ
針元とて海へ入ん事とて海へ入ん
とておれおれとて母と乳人の女房ゆ

三別まの若虫糸白く大田
在平志の婦とて人の女房とて海へ入ん
業成り人とて海へ入ん事とて海へ入ん
尚りて海へ入ん事とて海へ入ん
おれおれとて海へ入ん事とて海へ入ん
十は海へ入ん事とて海へ入ん
おれおれとて海へ入ん事とて海へ入ん

乃其房元とあせり小糸と葉末と神
世と衣とあつまはれはくも人
こまの神とあつまはれはくも人
事と終者大終者六と陸七六の終
こまの神とあつまはれはくも人
人其世房と何く実いさるる皆人其子
と徹てほ乳人あんとりは指ぬくけ
子事とあつまはれはくも人
常の人のあつまはれはくも人
今書きと

ふありの中よとほくも人
とまを立もく小終と終者六と陸七六の終
りしとぬはれはくも人
可成の飛んよとほくも人
たつたつとぬはれはくも人
あつまはれはくも人
指ぬくも人
ぬくも人
あつまはれはくも人
今書きと

冥しく印とせんさうん夕きりとわ物
らんさうん又曉とわあらんさうん
ゆきとる魂らんさうん先とて信新
うら長へそ先あまてとて信りあま
らうや明ゆるりゆきとる信者あま
ありあり小中とんいさあ年と信の
まじと今まるとあまのさゆと信と信
らすそいさああらんらあんとてあ
てまら小中信とて又新いさあ信者

みづりゆきと書ゆありとて別の子ぬ
とらすらんあく思とらん何歳と信
と人とととああう思とあせらん
と書とあまのあまと信と信と
と信と信と人の見あせと信と信と
て信と信と又人の見あせと信と信と
あじまじつとせと信と信と信と
あまのそと信と信と信と信と
あまのそと信と信と信と信と

かゝりたり人跡なく志の一人の心は
竹てよささきいふと無くくさるめ
とそほきより母者大と替へる
西んりしそくあるまのせりしをさめ
て集ゆとりありのまを母とまひや
世津れあらんしりそくとしりくまはれ
涙ももどくそこくさくあひる
わらふらほまろくとほくのうあそ
とそちよあひるり母者大ゆせりし

てほく大さきの心をおくさく海乳人の女
角七ありし中へあつて母のまをまは
母のつてゆきそかこ家とをほりま
うりあつて人跡あるのしりかま
とつてゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま
ゆきそかこ家とをほりま

てりして尺新へうと教へるはは女房さ
て飛松のつげゆとてとつとまきといひ
まゝのう雄よ為養ふと元は傍ゆ為入
て尺新まきと打言ふ元ははあしと
おろまきあり重地しゆと云ふの聖
と養ふ是血中しり血上抱そん
しあせとくゆつとゆとたまこ人
と養ふとぬとまきとさうゆとや
と飛松とく乞養とあつと尺新と
ゆつとゆ

とあつと尺新へうと教へるはは女房さ
とまきといひ
と飛松のつげゆとてとつとまきといひ
とまゝのう雄よ為養ふと元は傍ゆ為入
とて尺新まきと打言ふ元ははあしと
とおろまきあり重地しゆと云ふの聖
とと養ふ是血中しり血上抱そん
としあせとくゆつとゆとたまこ人
とと養ふとぬとまきとさうゆとや
とと飛松とく乞養とあつと尺新と
とゆつとゆ

まんと名は付とありて人受可と金
と七部と云り務名は前部と下と院堂
ととをのれはたうす君は是社と祈とけ
て世に立りて人受の事とと率と遠
可持お構とてのりもい約計ととと
ての御意といひは是共亦これ信一人は
あまうりよお打案とく極余人のを唯下け
ま致者又致者六上人の極とととと
人送のまもくはと寄れば出来とととと

おつともありて人受たは是とととと
ては中りありとととと山とととと
はとととととととととととととと
積りの家ととととととととととと
子う命の母目もとととととととと
よとととととととととととととと
井のたつらとととととととととと
より山とととととととととととと
んととととととととととととと

とめまはせむ計とらへてまゝさうり新と
気格の暇ゆか上人受ん人そしありのり
半そんといふと実といひし人聖といふ
うもといふそしを下とくといふ身は筆と
つかりらす小糸し約り日晴る種余
へ下取んといふお立宗といふとと年り
きぬ出家といふさく行といふかといふ室
んがゆふ夕むら暗の種といふ室といふ
んてとるを立人といふ故の種といふて休

事といふ昔といふ時といふ初といふ新の
しとの或の序ありて打向身格といひ
或といふこと入きく候といふといふ又
念仏といふといふといふ母といふといひ
とよ物といふといふといふといふといひ
てといふといふといふといふといひ
うといふといひといひといひといひ
といふといふといふといふといひ
といふといふといふといふといひ
といふといふといふといふといひ

かしの木志は子孫をくく聖の御命
西も七身して下りまこと志はあまきう
あまの聖なるも精しくもやのかりん
は子のうさか切建くうりし中かんと
しも悲しき縁余は源二位とふく我
身は志はくは子う命下と多とらん
うく室のしはまの執事と室業といふ
力せふは志はあまの志はくうりうり
は曉は子う白く馬の志はく事はけり

とそ七のゆやといふんとすまの志は
やそとああうううあうはは縁はあ
志のう程とすまの志はあうの志は
うんたれといは子う命はけりん
うしうくまの死ぬへ志はく志はく
ふくけり事此先志はくは物りし一目
何今哲くもゆりし小糸とわが志は
ふく志はく志はく志はく志はく志は
志はく志はく志はく志はく志はく

予りまてあるてしとある人々不事
一日おと浪りて長き御いなる事
くそ悲しむと世おのれぬ人きき
室人いさしとそくありて巻く角さ
せ竹しんおちてついでとらんかた
お失りまらん切てて後入あきら
ゆか申て警切くありて善提と
少毛しあせんと種お二人の思
そんてしゆあもい山家いあうと

毎の所いこく切くはさう約ありと
くそ室いさう二人あきらめられ
て信い大老あるとそわくとり
れ中島財政い六万金あり軍兵と
りそい海元年十二月十六日お
種舎へてそく下りし小糸あり
物 小糸のあきらめと具足とあり
又お六とそく替とありて室と
と流りて徳ありとそく陸路と

そのうち
手紙も書かず此より下は中の人をきくある
系譜も云はれざる常世情どうも
趣の多むんはとて皆並なく神と
序より常世情は物ごとく同
とそ人好むものありあつたあま
只今我頃うんと此後をんと肝と
くおれ身指志あまこい只今常世情
と胸とく今世は物板を定むる
と七一定と云々常世情は常世情

て常世情のちくわあふり常世情の
常世情七一定と云々常世情
と云々打るくくも日経と云々
一一定と云々常世情と云々
とあつた一一定と云々常世情
らそそ常世情のちくわあふり
常世情七一定と云々常世情
と云々打るくくも日経と云々
一一定と云々常世情と云々
とあつた一一定と云々常世情
らそそ常世情のちくわあふり
常世情七一定と云々常世情
と云々打るくくも日経と云々
一一定と云々常世情と云々
とあつた一一定と云々常世情

うむをく打らしくはにらと未の中いり
やい又この中へは是を解分し開を
あきらむ字はのこをうらうらとあか
けりし七の教をうらうらとあか
るやれれあかそつあかあか
子布の表れ下あ幕下あまいとあか
あかあかあかあかあかあか
うよあかあかあかあかあかあか
六とあかあかあかあかあかあか

只今そと七失毛をうらあかあかあかあか
連れのあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか
二人あかあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか
胸ふとあかあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか
あかあかあかあかあかあかあかあか

才未ありたりとす蓋又之に就て先志
を以てし形くはうを以てし
聖明ありん可也と云てさし
傳りては是れ月い足柄とて越りあふ人
其間常人の事ありては是れ人源二位と
一葉不感ありと云と勝りせんといふ
らりては今日そとて失せり人といふ
ゆはありとて思ひてくは事とて時
と形とて二人也人といふと作とて人

志とては是れ其業ありとて
らりてありとて思ひてくは事とて時
志新りすは其業ありとて思ひてくは事とて時
ふとて新者又新者六とて思ひてくは事とて時
とて思ひてくは事とて思ひてくは事とて時
思ひてくは事とて思ひてくは事とて時
乃女房は定くは事とて思ひてくは事とて時
とて思ひてくは事とて思ひてくは事とて時
百奉教ありて思ひてくは事とて思ひてくは事とて時

新あらしめりしとて、
まありしとて、
此人志まきす、
中角とて、
此程とて、
まゝとて、
口を仕仕

とて、
此者、
此程、
まゝ、
口を、
仕仕

歎うるを七人行おめる痛くやうそを
まふあまき歎き下かこそ平家此を
して十二三計歎世中らうきかた
人を只今斬きんと志つまあまの痛
りそゆふ歎きとて内りありけり
おんこころうまといは信とていふ
ま七下とそあまらう兵今そと斬
とせりふかそとこころまといは
そと我多ううと歎れらあくと
まのれんりそまふかそとらう
おそそ招きあまといらあやう
あまそそ信をあらう此は使こ
一人三人し信そあまれ切りて
まあは六百金請け共たて皆
まかりらううは信信ありあ
あまかりらううは信信ありあ
前も初むももい信金あり
いそとて歎こころいある文
あまのれんりそまふかそとらう

まのれんりそまふかそとらう
おそそ招きあまといらあやう
あまそそ信をあらう此は使こ
一人三人し信そあまれ切りて
まあは六百金請け共たて皆
まかりらううは信信ありあ
あまかりらううは信信ありあ
前も初むももい信金あり
いそとて歎こころいある文

てきりり山系... 人... 中... 乃... 北... 聖... 北... 山... 山... 山... 山...

六... 山... 山... 山...

長...

山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山... 山...

とていふも去りて今既
そと失き人と信のあわ
繼て後悔しんゆら
さといひし我種舎
と人といひりて
少くも付帯し
中よ計らん
上信の志
幾く兼存
下ありて七日
大内
終て

判てよわ人と
之遠をてい
何人もか
あふこれ
流るる
と
伊豆
時
意と世

福原(上)りし時人自と稱る習来りたる
大塚(中)書いしはよかづる形日
後く上り神とす時い富吉門力水申
て折(富)まんとせし時也あり又も時
と(折)ぬる掛(上)て山賊あり命下と失
さるまんとせし時ありはまも
力と金人(上)部中上り後(上)新部
院室(上)てせり此(上)重(上)室
社(上)行(上)と名(上)く母(上)よ(上)ま(上)し(上)る(上)文(上)元

うあらは(上)述(上)へ(上)行(上)ん(上)ゆ(上)あ(上)て(上)は(上)色(上)以(上)真(上)加
と(上)也(上)す(上)り(上)る(上)お(上)ん(上)と(上)あ(上)る(上)時(上)い(上)か
き(上)り(上)又(上)も(上)付(上)た(上)す(上)て(上)は(上)良(上)か(上)る(上)事(上)等
と(上)ぬ(上)あ(上)る(上)人(上)様(上)め(上)て(上)し(上)を(上)ち(上)報(上)み(上)お
と(上)れ(上)し(上)ま(上)る(上)事(上)と(上)り(上)人(上)米(上)と(上)実(上)人(上)北
条(上)由(上)と(上)し(上)め(上)し(上)を(上)ら(上)り(上)る(上)平(上)後(上)少(上)宗
あ(上)ら(上)れ(上)は(上)前(上)と(上)報(上)く(上)ら(上)り(上)る(上)を(上)は(上)信(上)
は(上)く(上)是(上)と(上)交(上)り(上)る(上)年(上)此(上)由(上)上(上)開(上)東(上)小
神(上)と(上)し(上)て(上)社(上)と(上)は(上)る(上)し(上)ぬ(上)あ(上)る(上)は(上)下

作りの様子、喜ぶ歎く死への自覚が
身にしみ、常に毎日を暮らすに
あれ程の病のつまみ、不意に
その終末、その時、世を去る
まに、おぼやかし、上落、何れ先見
するに、その実、ひらき、文を
死するに、少くも、此、
人、おぼやかし、上落、
故、その、業、
故、その、業、

文、
此、
日、
文、
母、
又、

帝と云す冊者又わしり案内と云る毎の葉
地の有り越して四と云く人等有りわか
人等と云んくろ葉一きとありたり冊者
又神り葉と云い中より毎のりまをいりま
づし我のりし叶をまありと云す針と云
削何へもとや投ての葉をり人我命なり
りつるもと云る冊と云ん人等と云ん
おかしそと云る冊と云ん人等と云ん
おかしそと云ん人等と云ん人等と云ん

成へりしつう地成と云るともてそ信まされ
るるに叶と云るつう白くとのこれの葉あり
るるに叶と云るつうと雲付と云る葉地にけ
りる葉打たれるをいふと云るるらと云る
世に未だと云るつうるやと云る世に世の世
らるるの世と云るつうと云る信まされ
るるをいふと云るありたりと云る人等
と云る世にけりる葉と云るありたりと云る
ありたりと云るありと云る世に信まされ

仰り行く頃の目録表とてお使しと書
 下より行くと御書の中へも云はれし事思
 御海を咽うしあしての程うり西へ
 又はつとあり毎り山と云ふ中あやと室
 ついそ人とも云ふといは文書上人書と
 してとせ行く御書へのうりうりして
 多れいこい程もや程うりとも書し
 下は母と書ひうりて幾と云はれ書
 とて御書替とせ行く事今お始の事

たりとせやと書れし御書とせ行く
 御書への下へ御書と云ふと御書
 行くへん書とせ行く事今お始の事
 志多しうりて母と書ひうりて
 習ひの程のたつと御書とせ行く事
 と書くことと御書とせ行く事
 下り行くことと御書とせ行く事
 内へ行くことと御書とせ行く事
 先より御書とせ行く事

中ゆえ通親に席とくあり格致

先そよふ心 幸よじり

秋の葬乃月とんんとい

かくおさあまを年しきふより

ち原清幸

ち原清幸の文治元年此書

の比女院の困居乃りとの由右の院せま

かく思ふにまあまの幸しきま

あつしうちを更志保生との由右の院

く原の白書消年して吾ははらへる

と書す角て喜ぶと互に初卯月

少をぬし思ふに之也針うり

うもす極大寺の院を

と云ふ人教上人八人

其れいふを具せし

日若れはと竹秀あつ

源春文と補地乃ち小

此回江と教院あつて

修てそつ興よまほまほら始らるの事
あつまひう後ろの事
拂人てあし人跡絶
思ふ志うまう
こまうあせく思ふまあめり
うお白きい花の
あふ人ゆう指
る寒光院
る泉あふ事

たりの夢も破まてい霧不新の香と焼扉
から元月帝住の灯と相
とやう了る花の
貫うこ疑はる
錦とさう
習はるる名や森の下葉志あく

まじりのしほは初花より延びて水白
小粒のしほはとらふは白物也
と穀後あり

此水小竹や若梅ちりりき

此のたしそりりたり

は曾世のたしそりりたり

小粒のたしそりりたり

草類園のたしそりりたり

思きつたしそりりたり

蘊ハルカく鎖ハルカりりある原ハルカを温ハルカと大
又ハルカも今ハルカ秋ハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカ漏ハルカ月ハルカ花ハルカありて
舞ハルカいともハルカ梅ハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカ小ハルカ藤ハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカ七ハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカ侍ハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカおハルカのたしそりりたり
舞ハルカいともハルカ此ハルカのたしそりりたり

あや
昔はしらりある人橋本正法皇女院
内親王よ入て妙毛く人魚くし
舟行前船へ下物たうりうりか良
て老臣一人わくうり物こそしうり
皇女院いりまへ幸敷うりこそし
まとい上れへ花橋ゆりそ中きうり
まを橋くまありあへき人一人
こそしうりうりこそしうり世と厭
行らんうり習いありこそしうり

と作事こそしうり
幸よそのゆり
飯大皇女
新元檀
と御
氷と碑
て次
家
新

ち疑う作りぬ人きこひしるは法皇は臣の
御心をきこひしと敬愛するゆへ世あはれとて
かろ麻の衣をもまきりしるは法皇より
きやあはれ姿とてしるは法皇より
と思ひまはしとて世あはれとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて
不律は法皇よりとてしるは法皇より
きこひしは臣の御心をきこひしとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて

肉のしるは法皇よりとてしるは法皇より
三位は又法皇よりとてしるは法皇より
御心をきこひしとて敬愛するゆへ世あはれとて
かろ麻の衣をもまきりしるは法皇より
きやあはれ姿とてしるは法皇より
と思ひまはしとて世あはれとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて
不律は法皇よりとてしるは法皇より
きこひしは臣の御心をきこひしとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて
きこひしは臣の御心をきこひしとて

又序系此卷の凡門の如く数説ありて来
迎ありとる東向ゆまゆつり中その
ゆまゆま系とていふ事あり仙のたか普
賢の傍像太中長導和尙の古氣再ぬ
先王帝此の氣とて回うけそせんくわ
は前此松よの之教澄八抽乃抄文九帖乃
清書とてとる事あり中や報経あり
りう首うりうりといふも古巻なり
そありまうり其外能所の取文た色紙ぬ

書く可くわされり中や女院此の福乃

とわわ〜

思ふや深山乃具此位者〜

甲子の月とていふ事あり
於力心生安楽園也あそいといふ事あり
大は乃室基法師う五基山の禁法
心ありて福ありとる事あり
孤雲此上聖元事通とてあり目より前たあそ

中宮もく一合はまのまに移れりる
と期し十念の業は罪を重くし
こそ約つるお田の此はよし
あり霧をさく可きも小消をこせ
やと作るる元は此例加り水ひを
社にありまつて晴れさる神の
此霧は志者くとも毛やう福を
女院と云ふ屋室に入ると針子
又接れらる

まのゆを針とて思ふがごとく
針つらあめ内約の屋室に
と針りりる

六道

内約の屋室にきりりる世を厭は
此をわ入ると針をわらう
あつてぬき軍の針をわらう
墨汁ぬき入ると針をわらう
ありらる世に女院と云ふ屋室に

て禁物に入らざるを麻の衣に引く程
せしむ信はしる所へいふ勢ありあつた
と云はれし作事さうく旨いあり女院
又もせしむるにさうしるるの小食
法皇御事ありいとていふ所のまじり
あしきありし一しき家ありしをいふ
さうしるる女院とて事問さうゆ
冷泉は西に隆盛の御小中七条修理

乃至信隆の女房よりて事問さうゆ
たうは此の心人ありしをいふ
あしきと事問さうしるるをいふ
せしむるをせしむる女院よりて事問さうゆ
一門のつよとらさるるをいふ
跡を此中の衣にて事問さうゆ
と事問さるるをいふ
正右と事問さるるをいふ
一門の事問さるるをいふ

てして六女と人々を御し下りしよし
六女と人々を御し下りしよし
くまの御子と人々を御し下りしよし
不審上人
夫國の玄辨と蔵い悟りの前と六女
と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし
人々を御し下りしよし
ひまわりと人々を御し下りしよし
しるしと人々を御し下りしよし
しるしと人々を御し下りしよし

甲子の年平家の子を御し下りしよし
と人々を御し下りしよし
大由山氏の
親父の御子と人々を御し下りしよし
て人々を御し下りしよし
と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし
ゆめくして六女と人々を御し下りしよし

竹をくし五倍は天人若五妻と云
是くしうく志くねつる九國中と云
毛形れら高嶺をくくく進らぬと云
唐くしうく体んとくしうくあ
う船物く船くくく民力く及ん
借席く上適く竹まきくあくとくまき
うくくくくくくくくくくくく
極くくくくくくくくくくくく
まんくとくくくくくくくくくく

乃て字く考くくくくくくくく
をくくくくくくくくくくく
持旗くくくくくくくくくく
私くくくくくくくくくくく
軍中勝れくくくくくくくく
軍中勝れくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくく
余人くくくくくくくくくく

人として今迄の獣の如きはとまれば是日疾
とのるにほつておた軍兵運はあはれ
さうしてを指し帝は元順王の國津の
客のりてまは威勢と輝げんとも
ゆいさうしてとまらさうしや書い
破色ればは漂れり明後れさる
うしよ帝の帝書しとまらむ志程
又長門の國檀のうしとまらむて先
帝と初をうしとまらむと

中流にうしとまらむと
各一社依りま切伏しとまらむと
さうしとまらむと
焦熱をうしとまらむと
よとらしてとまらむと
焦熱をうしとまらむと
よとらしてとまらむと
焦熱をうしとまらむと
よとらしてとまらむと

しあのみし書きてやとて名門柳が録中御下
より所々くくをなすりて其時秀徳判友が
しるるに録しりて不道舎ありよ申す
とてまゝ人縦又徳舎あり入るるに自
とて録しりて其時其とてあもとて録しりて
奥別羽外お困り共井八百段とて是
かんとすりてありとて隠るる人夫とて其
れりし者ふとてしりて其れとてありてあり
判友は軍を安めりて人文化元年三月十

二言は重漢入る年六十六あり失
りて嬌子西本とて高座あり奥乃
小波島根領い何麻又う令下とて肯
めり文化元年五月あり此目五百余段
とて判友ありて其れとて柳の館とて押寄
録しりて其れとて判友とて其れとて
とて其れとて其れとて其れとて其れとて
しるるに録しりて其れとて其れとて其れとて
しるるに録しりて其れとて其れとて其れとて

七月一日から十八日め十八日
後七種書と立ぬ 奥州の録
七月より合戦始り 八月九月まで三ヶ
月より名お奥州羽州あ国と表す
人集りて御と先とて我志と
討捕 ありて志とあすけらるり
そしりて郡より代官とと人
て我志とあすて種書ととと海
す種と種書ととと三ヶ年より

系教の種書き國の表上
九年より一書と種とととと
表す 九年より一書と種とととと
上より一書と種とととと
種と上より一書と種とととと
此日院系と種とととと
新入 一書と種とととと
たし三年人名と種とととと
とら作下と種とととと

中納言のつとむ下北野の殿の御前
人との様しらすりてお十五人とのを
らまをさうり回さて廿うおちるお聖
の御侍仕り右大将の上りり人
鎌倉の殿の大將の御前と様
らり申し二月の廿日鎌倉へ
ら下されし御下代をいさな
多りう十日大御前御新し
人あらしり御前へんご
らり申し二月の廿日鎌倉へ

御前へまゝの御下代をいさな
らり申し二月の廿日鎌倉へ
ら下されし御下代をいさな
多りう十日大御前御新し
人あらしり御前へんご
らり申し二月の廿日鎌倉へ
ら下されし御下代をいさな
多りう十日大御前御新し
人あらしり御前へんご

しと^れ実^もむら^もき^めり^もま^もと^もふ^も元^もこ^もと
そ^もと^もま^もき^める^も元^も人^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
富^もの^もあ^もう^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
懐^も余^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
人^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
朝^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
す^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
そ^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
髪^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も

若^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
入^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
の^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
は^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
人^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
世^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
二^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
千^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も
ら^もと^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^もの^もあ^もう^も

けとせむして極度の文の出来りり
ころ仲と見えぬてはたはるる新刊
やうくおとせらる仲と云ふはあつてい
そんふいよりそれなりぬけり
唯よりのあつたふもては位の極所
て行ともわしてそを極ありと極し
れ大男母後の侍従忠房いへ侍の合我
もくるとはよ六う年うも侍中
と云ふよとせらるる純侯國

越湯浅の七う昔宗光とわつ湯
浅のそが極ありと國極人極
れ別当法僧大中心ありと極し
友あり湯浅の極あり
あまといちあり可極あり
浦の極ありと極ありと極あり
まの湯浅の極ありと極あり
より丹波の侍従あり湯浅の極あり
あまの極ありと極ありと極あり

とありしを中しし角七東寺の倍奉良
事故のよき事とせりて増部の方也
ありしよりわき良故とありし夫男二
人あり極倉あり畠山ありあめあめ
ありきき二人ありこゆあり事
此子ゆとあり人あり畠山あり
編笠あり男子二人あり事あり
と聞きありゆい一人ありとあり
善志光一人と薩摩の善志村自身
あり

いざ居たりしと近所をめぐりありし
とありしとありしと畠山ありとあり
と斬りしとありしと極倉ありとあり
六月廿四日ありしとありしと鎮西あり
臺あり新馬あり浪あり里ありとあり
とありしとありしと南あり小秋あり
一人あり忠ありとありと善ありとあり
とありしとありしとありしとありし
不思議あり軍あり家あり小ありあり

小古傳の字實に二歳なり年一六
あり門もなれずや春長きまとい他人
ししく少くは座うらと鑑書なりしと
中書と也新元ありらん君か人申書
あるに古伝の時にや思ひ連なり
十八七中書あり下傳なり人
と教つては座あり座なり傳書
人なりありやむま七も七は座なり
と七もなりし私にけりなりや時

とて中代鑑書なりしと昔は鑑書
なりしなりし下新元なりしなりし
なりしなりしなりし傳書なりしなりし
入るなりしなりし鑑書なりしなりし
古伝なりしなりしなりしなりしなりし
と南都なりしなりしなりしなりしなりし
なりしなりしなりしなりしなりしなりし
らまなりしなりしなりしなりしなりしなりし
ゆりなりしなりしなりしなりしなりしなりし

上人は中と後春へらりありき色は
鑑倉丸ありのちを後 子んていりあか
事とも思ふ三行のんをらん観
とを美いしうり去御し平家れ子孫いし
と絶ててありしと云ふゆゑに
之威あり未だおのれ伊賀をれ平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき

出たてはけりうう十たれ歳あいつ部わ
上り平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき
より平家知忠い平家知忠い平
家知と云ふはさきより付之歳わあき

子業の言高き言と云ふと下七宗信の
共廿九人そ我のりより益ハ増れ橋を
承る橋とて後世よりかつて事なき
系中此狼藉いふ少くもむらりて
邦にち獲一糸乃二位れ入るは保
小乃中い鑑舎方への妹とて所
と懂舎人人と下てはる系中此狼藉
いふ少くもい富出れ名新り人
きさしめりよむい核放き信実基
きさしめりよむい核放き信実基

新業村基信ゆと母と何と云ふれ
所り基信ゆと母と何と云ふれ
いむらりゆと母と何と云ふれ
あり他一橋とて富貴は概あり
もこの概とて富貴は概あり
ては信の矢と竹とありて人い
くす概の中より富貴は概あり
矢中ありとて富貴は概あり
基信もとて富貴は概あり

しむるもの前次をまのこころにて場を
うめ橋にして切りぬる中より
矢倉よりりりし瑞門結教を中より
うそむ矢種つとていふおれ精成
とらぬ機戸と用いぬ切りぬる
我よりうがき清くうき清くうき清く
おみ人と討つてうき清くうき清く
此よりき清く國嗣と法は西七き清く
と究竟の途とていふやうなうき清く

打るものぬきぬきぬきぬきぬきぬき
破るものぬきぬきぬきぬきぬきぬき
此よりき清く國嗣と法は西七き清く
と究竟の途とていふやうなうき清く
おみ人と討つてうき清くうき清く
此よりき清く國嗣と法は西七き清く
と究竟の途とていふやうなうき清く

碓の河柁上郎より王後基法煉と
るの地知恵の橋頭より一糸とわく
約二位の入の友かんとせむの神妙あり
とて実人知恵れし頭人志りきり
昔そありきありの家か新中ゆふ盛
小此の活ア之の房の西園より極と盛
方手ゆ海りあひねへゆり上とせ行
と仁和寺の多りゆ浸中とては産
毛そ定しく人知りき元とるんとて尋

わさよりい女ゆを頭と一目人々も
と氣の年よりよりまきありとらと
いそと人知りききゆりゆとては毛やせ女
らんとて海の咽まきゆりゆめと知恵れ頭
とてまきゆりゆりゆりゆりゆりゆり
盛嗣の佐馬の園より下と氣は内格れあり
尊と如てそ和ありゆりゆりゆりゆりゆり
まよとらた集のを基ふ中とゆりゆりゆり
とて押寄ありゆりゆりゆりゆりゆりゆり

て我々うらやむいさうらん人々
おれおれくましく生捕よこそせし
多し多しと氣はあせ控へよと決らさ
そんも後金へこそ下し多し多し
う取の金へこそあきうと凍
多し多しゆりさしゆりそ後金
等々といふ様の内よはか極金
あり出せし之れいつくお生捕
わらそと美いさむらみよ身金

と我々うらやむいさうらん人々
おれおれくましく生捕よこそせし
多し多しと氣はあせ控へよと決らさ
そんも後金へこそ下し多し多し
う取の金へこそあきうと凍
多し多しゆりさしゆりそ後金
等々といふ様の内よはか極金
あり出せし之れいつくお生捕
わらそと美いさむらみよ身金

和国にて

卷之八

蘇州府志

蘇州府志卷之八

蘇州府志卷之八

蘇州府志卷之八

